

## 狸 5 狸を拾った話 = = = 猪・鹿・狸より

山の中で狸を拾ったからとて、格別珍しい出来事でもなかったが、実は狸一つ捕るにも容易でなくなっただけに、話の種にもなったのである。ある時村の某の男が、朝早く山田へ麦播きに行くと、途中の田圃の中に、狸が一匹まごまごしている。今頃狸のいるはずがないがと、暫く立ち止まって見ていたが、まぎれもない狸なので、すぐ引っ捕らえて撲殺してしまった。見ると眼から眼を撃ち抜かれた、盲目狸だったそうである。近所で狸を撃ちもらしたと言う話も聞かなんだから、よほど遠い処からでも迷って来たものであろうと言う。話はただそれだけであったが、実はその同じ路を、一足先に通っている男があったのである。拾った男とは隣り同士で、上と下の屋根であったが、どうしたわけかひどく仲が悪くて、お互いに何かと悪口の一つも言わねば気のすまぬ間柄であった。しかもそれが家ばかりでなく、田圃も隣合って作っていたのである。

それで拾った男は、その狸を担いでそのまま田圃へ行ったが、自分の田には行かないで、先に来た隣の男の傍へ行った。そうして出し抜けに言うたそうである。道を歩くにも少しは気をつけて歩けと、拾った狸を見せながら怒鳴ったと言う。如何に田が可愛くても、朝も暗い内から起きて、脇目もふらずに来るから、こんな福が落ちていても拾うことは出来まいと、そう言うたそうである。

あんな無法を吐く奴に遇っては叶わぬと、拾わぬ方の男がひそかに語ったものだった。如何にも論外の無法に違いなかったが、田舎にはまだ斯うした気持ちの人がいたのである。極端に昔風の、狩人にでもあるような、特別な気性から考えると、祭日にも隠れて働きたいほど、朝から晩まで仕事に熱中して、少しずつでも家産を増やして行く男の態度が、けなるいなどと言う気持ちでなしに、度し難い馬鹿者のようにも見えたのである。まったく狸一匹が、米一俵近い値にもなった年だったから、福運ともなんとも言いようはなかった。せっかく先に通っても、拾えないような者は、馬鹿者に違いはなかったのである。

話がまた狸へ戻るが、狸は時おり人家の軒などへ、手負いになって迷って来ることがあったそうだ。ある家で朝早く戸を開けると、表の端に狸が一匹、よちよち歩いている。見ると犬にでも噛まれたか体中血だらけにして、人が近づいても遁げる力もなかったそうである。さすがにその家では殺しかねて、せっかくの福を近所の若い衆にやってしまったという。